

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

『カスターブリッジの町長』再考--登場人物たちの人物造型が意味するもの

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): メトニミー, イングランド, スコットランド, カナダ, フランス キーワード (En): 作成者: 橋本, 史帆 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006019

『カスターブリッジの町長』再考*

— 登場人物たちの人物造型が意味するもの

橋 本 史 帆

要 旨

本稿では、「メトニミー」の視点から、トマス・ハーディの『カスターブリッジの町長』における人間模様を読み解いていく。この小説では、登場人物たちが、彼らが生まれた国や、彼らが関わる植民地や地域などに関する属性を持つように造型されている。そして、その彼らの言動に着目すると、この小説には、ハーディが読み取った19世紀のイングランドとスコットランドの関係性や、イギリスと、その植民地カナダと隣国フランスとの関わり合いに関する彼の見解が表出されていると思われる。本稿では、カスターブリッジを舞台に、ヘンチャードとスコットランド出身のファーフレイとの間に起こる町長交代劇を分析し、イングランドとスコットランドの関係性を明らかにする。さらにまた、ジャージー島出身のルセッタと、カナダ出身のエリザベス＝ジェインの人生を考察し、作者がフランスとカナダをどのように小説化しているか検討していく。

キーワード：メトニミー、イングランド、スコットランド、カナダ、フランス

はじめに

トマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) は、イングランド南部にある彼の出身地ドーセット州とその周辺地域を「ウェセックス」(Wessex) と名付け、おおむね、その土地を舞台にした小説を書いた。このことから、彼の小説群は「ウェセックス小説」(Wessex Novels) と呼ばれるようになった。「ウェセックス」の風土とそこに暮らす人々を描いたハーディの小説群を俯瞰してみると、そこにはストーリー展開のうえで、一つの顕著な特徴があることに気付くのである。それは、作中の主な登場人物たちが何の説明もなされないまま、しばしば他の土地や地域や植民地や外国に渡ったり、また、唐突にその土地から戻ってきたりする点である。そして、これらはストーリー展開に新たな流れを作り出し、それまでのストーリーの行き詰まりを打開する効果を発揮していると思われるのである。

しかし、作者が登場人物たちをストーリー展開の中で、上記のような行動を取るように描くのは、単に話の展開を複雑にしたり、面白おかしくしたりすることだけにあるとするならば、その作品世界はあまりにも作者の気まぐれに左右されていると批判されてもおかしくはない。

そうではなくて、作中の人物たちが外地へ渡ったり、そこから戻ってきたりするように書かれているのは、彼らと、彼らが関わりを持つ国や地域との間に、何らかの関連性を認めることができるように作品の意味世界が構築されているためと解すべきではないだろうか。

実際、ハーディ小説の登場人物たちは、彼らが生まれた国や、彼らが関わる諸外国や植民地や地域などに関する属性を持つように造型されている。例えば彼らの中には、「ウェセックス」で生活しているにもかかわらず、生まれ育った国や地域の言語にこだわっていたり、移住や仕事を求めて移り住んだ国の文化や風習を受け入れようとしている。こうしたところから、登場人物たちの言動を、彼らは何らかの属性を持つ国や地域と結び付けて読み解くことができると思えるのである。そして、この文脈で想起されるのが、「メトニミー」(metonymy)と呼ばれる修辞法である。*A Dictionary of Literary Terms*によれば、「メトニミー」とは、“the substitution for the name of a thing of the name of an attribute of it, or something closely associated with it.”(196)と定義されているように、ある物を言い表す場合に、その物の属性や、それに関連する物で代用して表わす比喩表現のことである¹。

本稿では、この「メトニミー」の観点から、『カスターブリッジの町長』(*The Mayor of Casterbridge*)を読み解いていくことにする。1886年に『グラフィック』(*Graphic*)誌に連載されたこの小説は、かつて酒に酔った勢いで、妻スーザン・ヘンチャード(Susan Henchard)と娘のエリザベス＝ジェイン(Elizabeth-Jane)を見ず知らずの男に売り飛ばした過去を持つ主人公マイケル・ヘンチャード(Michael Henchard)が、その非を悟り、努力を積み重ね、商才を発揮した結果、カスターブリッジの町長に就任するものの、やがて、自分の使用人であったスコットランド人ドナルド・ファーレイ(Donald Farfrae)にその座を譲り渡さざるを得なくなった経緯を綴った作品である。

この作品に登場する人物たちの人間関係に着目すると、その小説世界には、ハーディが読み取った19世紀のイングランドとスコットランドの関係性や、イギリスと、その植民地カナダと海を挟んだ隣国フランスとの関わり合いに関する彼の見解が表出されていると考えられる。そこで本稿では、はじめに、ヘンチャードとファーレイの二人が辿る人生から、ハーディがイングランドとスコットランドをどのように作中に描き込んでいるかを論じていく。その後、スーザン母子がヘンチャードによって競売にかけられた後に渡ったカナダと、ファーレイがエリザベス＝ジェインと結婚する前に婚姻関係にあったルセッタ・テンブルマン(Lucetta Templeman)の出身地に注目しながら、彼女たちが町でどのような人生を送るか検討していく。これらの分析を通じて、ハーディが、登場人物たちの出身地である地域や国や島などを、どのようにみていて、それをどのように小説化しているか知ることができると思われる。

1 カスターブリッジにおけるヘンチャードとファーフレイ

小説の舞台であるカスターブリッジは、イングランド南部にあるドチェスターをモデルにしたとされており(深澤30)、そこは、昔のイングランドの名残を留めている町ということになっている。本作品の序章では、貧しい干し草束ね職人であるヘンチャードが、酒に酔った勢いで、市場で妻スーザンと赤ん坊のエリザベス＝ジェインを、初対面の水夫ニューソン(Newson)に売り渡してしまう²。その後、ニューソンは、スーザン母子を連れてカナダに向かうことになる。それから約18年が経ち、第3章では、彼らはカナダからイギリスに帰国したものの、商用で出かけたニューソンが溺死したために経済的に困窮したスーザンが、別れた夫ヘンチャードを探し出すために娘と共に、カスターブリッジを訪れることになる。その町に対してエリザベス＝ジェインが、“What an old-fashioned place it seems to be!” (27)³と述べているように、彼女の目からみても、カスターブリッジは時代の趨勢から取り残された町である。例えば19世紀半ばのイングランドでは、種をまく際にすじまき機が使用されていた。しかし、この土地では、未だに人の手で種がまかされている。さらにまた、農作物の取引をする場合にも、人々は書面に寄らず、口頭で契約を結んでいる。したがって、昔ながらの農業方法と商慣習に固執するカスターブリッジは、古色蒼然としたイングランドの雰囲気留めている町であることがわかる。

このようなカスターブリッジという町において、ヘンチャードは穀物商人として成功を収め、ついに、町長の地位にまで上り詰めることになる。彼の商売の方法は、“rule o’ thumb”(48)であると記述されているように、どんぶり勘定で店の営業状態を判断し、口約束だけで農作物の取引をするというものである。しかし、幸いにも、経験や勘に頼るこの方法が、当地方の商慣習に合致しているため、従来の商取引に精通しているヘンチャードは、独占的に穀物を商うことができる立場を獲得している。町一番のホテル、ゴールデン・クラウンで、ヘンチャードが町の有力者たちを集めて開いた晩餐会の場面は、町長になった彼が、町での繁栄を享受していることを物語っている。カスターブリッジにやって来たスーザンは、消息不明のヘンチャードがいると教えられたホテルに向かう。そして、彼女はそこで、宝石入りの飾りボタンと重い金鎖を身につけたヘンチャードの「威厳のある声」(“commanding voice”)(32)を耳にする。さらに、彼が周囲の者たちに対して高圧的に振る舞っている姿を見て、スーザンは、彼が財力と権力を手に入れていることを察知するのである。このようなヘンチャードの様子から、彼がたどり着いたカスターブリッジでその後根をおろし、堅実に生きてきたことがわかるのである。そして、そのような彼は、カスターブリッジで、商人としての成功をその手中に収めるばかりか、町長の地位までも獲得したのである。

次に、スコットランドからやって来たファーフレイが、どのような人物として造型されているか分析していく。アメリカでの成功を夢見て生地を離れ、移動する途中でカスターブリッジ

に立ち寄った彼は、品質の悪い小麦を改良する方法をヘンチャードに紹介する。その技量を評価されたファーフレイは、ヘンチャードが営む穀物商店の支配人として雇われるようになるのである。この後、ファーフレイは、“initiating himself into the managerial work of the house by overhauling the books” (74) とあるように、合理的に店を管理する能力を発揮する。そして、彼はヘンチャードの店を繁盛させることに成功し、ヘンチャードの片腕となっていく。

ハーディは、1895年にオズグッド・マキルヴェイン社から出版した3巻本と1912年のウェセックス版の序文の中で、ファーフレイという人物について、次のように述べている。

It must be remembered that the Scotchman of the tale is represented not as he would appear to other Scotchmen, but as he would appear to people of outer regions. (*Thomas Hardy's Personal Writings* 19)

つまり、ハーディは自ら、スコットランド人が他の地域の人々にどのようにみられているかを意識して、ファーフレイという人物を造型したと記しているのである。したがって、ファーフレイには、外部の人々の目に映じたスコットランド人の持つ属性が強調されて描き込まれていたということなのである。このような作者の意図は、ハーディがスコットランド出身の友人のアドバイスを受けながら、ファーフレイにスコットランド訛りの言葉をしゃべらせているところにも読み取ることができる (Wilson 330)。例えばファーフレイが遣う言葉を表記する時、スコットランド方言の発音にならって、「世の中」を意味する“world”の代わりに“warrld” (48) という綴り字が遣われたり、「穀物」を意味する“corn”は“corren” (46) という語で書かれたり、「広告」を意味する“advertisement”は“advarrtishment” (46) と表記されている。この点からだけでも、ファーフレイはスコットランドをメトニミー的に表現した人物として捉えることができるのである。

それでは、町長であるヘンチャードとファーフレイの関係を読み解くために、国家的行事の祝賀日⁴に彼らが催した行事と、その行事が終わった後の二人の立場の変化について考察することにする。当日、ヘンチャードは入場無料で紅茶のサービスを受けながら、芝居やゲームを楽しむことができる催しを町民のために計画する。ところが、途中で雨が降り出してしまったため、屋外で行われていた彼の企画は失敗に終わる。一方、ファーフレイは入場料を徴収し、悪天候でも催し物を続けることが可能な巨大テントを張り、人々がダンスを踊って楽しめるようにし、その企画を大盛況のうちに終わらせる。この行事の成功・不成功は、ファーフレイの商人としての才覚が、ヘンチャードのそれよりも優れたものであることを証明するものである。その成功によって、ファーフレイは彼の実践的な実力を評価した町の人々から、ヘンチャードに代わって店の主人になることを望まれるようになっていく。間もなく、彼は、彼

の能力と人気に嫉妬したヘンチャードによって解雇されてしまうが、ヘンチャードと同じ穀物商店を開き、優れた経営方針で店を繁盛させる。さらにまた、ファーフレイはすじまき機の導入を試みるなどして、地元の農業の発展に努めるのである。こうして、彼は町の「改革者」(“the innovator”)(166)と呼ばれるようになり、ヘンチャードの町長職の任期が終了すると、町の有力者の推薦を受けて、町長に就任する。この意味において、ファーフレイはカスターブリッジという古くさい町に、新しい胎動と発展をもたらすことを期待される人物となるのである。一方で、同業者のファーフレイに顧客を奪われてしまったヘンチャードは、占い師に農作物の収穫時期を占ってもらおうという行為に出る。しかし、占いが外れたことで、彼はすべての農作物を失うことになり、その損失を補填するために、店と家を売る羽目になる。ヘンチャードとファーフレイの二人がカスターブリッジで送る対照的な人生には、ダグラス・ブラウン(Douglas Brown)が指摘しているように、新旧の農業技術上の、また、商業経営上のやり方の対立を読み取ることができる(65)。しかし、ヘンチャードが没落し、ファーフレイが台頭するようなストーリー展開を通じて、作者ハーディは、イングランドとスコットランドの力関係において、スコットランドが力を付けつつあることを暗に示唆しているのではないだろうか。

両地域の歴史的背景をみると、1066年の「ノルマン征服」以後、イングランドはスコットランドに度々侵攻するようになる。これに対し、スコットランドはフランスと同盟を結ぶなどして、イングランドに対抗した。この両地域の対立関係は、1707年の連合法によって、スコットランドとイングランドが法律的に統合してからも続くことになる。このようなイングランドとの抗争の中であって、18世紀後半、スコットランドでは、ジェームズ・ワット (James Watt) が新式の蒸気機関を発明し、イギリスの産業革命の推進に大きく貢献した。また、19世紀後半になると、スコットランドは技術革新と機械工業の進展により、ヨーロッパにおいて、イングランドに次ぐ経済発展を遂げるようになったのである (Hoppen 523)。さらにまた、世界経済を牽引するようになっていったスコットランドは、様々な分野において、大英帝国の発展にも大きな力を発揮していった。例えば18世紀半ばあたりから、スコットランド人はイギリス政府によって軍や国家の要職に登用され、彼らの活躍は本国イギリスのみならず、植民地でも目覚ましいものであった (Colley 120)。産業革命をきっかけに世界有数の造船竣工地域となった当地では、多くの蒸気船が製造され、それらは大英帝国内の人々の経済活動を支えるようになっていった (Campbell 168)。金融業に目を向けると、1884年の外国・植民地対象の投資会社の4分の3は、スコットランド人により経営されていたとも言われている (木畑171-72)。つまり、19世紀の植民地争奪期に、スコットランドは帝国の拡大と繁栄に軍事・産業・商業・金融各方面で協力し、大英帝国の富や権力の拡大に寄与していたのである。

以上のような、イングランドとスコットランドの関係性に目を向けると、両地域の競い合いは、ヘンチャードとファーフレイが主催した催事の成功・不成功や、その後に二人が辿る人生

模様に出されていると解することができる。つまり、イングランドと対等か、それ以上の力量を発揮するスコットランドの躍進が、ファーfreyが商店経営を合理的に行ったり、パビリオンにおける出し物を大成功させたり、農業用機械を町に紹介したりなど、機をみるに敏であるファーfreyの言動に読み取ることができるのである。そして、行事を成功させた後、商店を繁盛させ、町長にまで出世するファーfreyの成功と、店を失い、町長の地位から退くヘンチャードの衰亡は、スコットランドとイングランドがイギリスという国の中において共存する中で、前者が後者を凌ぐ実力を発揮していると作者が感じ取っていたことを物語っていると思われるのである。

2 スーザンとその娘の遍歴

ヘンチャードによってニューソンに売り渡された後、ニューソンと共にカナダに渡ったスーザンは、およそ12年間を娘のエリザベス＝ジェインと共にカナダで過ごすことになる。この節では、二人が長く滞在していたカナダからイギリスに戻り、暮らし始めたカスターブリッジで味わう苦悩や、ヘンチャードと町の人々との不和について論じていく。

カナダに向かったスーザンとエリザベス＝ジェインの足取りをたどると、イギリスを出発して3カ月目に、赤ん坊であったエリザベス＝ジェインは病気で亡くなってしまふ。その後、間もなくして、カナダでニューソンとスーザンとの間に娘が生まれたため、スーザンはこの赤ん坊に亡き娘と同じエリザベス＝ジェインという名前を付けた。つまり、スーザンと共にカスターブリッジにやってきたエリザベス＝ジェインは、ニューソンとの間に生まれた娘なのである。スーザンと2代目エリザベス＝ジェインにとって、カナダでの生活は過酷なものであった。貧しさと苦痛に満ちたそこでの生活は、スーザンの心身を蝕み、エリザベス＝ジェインを内気な性格の持ち主にしてしまった。エリザベス＝ジェインが12歳頃になって、家族はカナダからイギリスのファルマスに戻るが、相変わらず貧しさからは抜け出せない。そして、ニューファウンドランドへ商用のため出かけたニューソンが溺死したという知らせを受け、スーザンは娘により良い暮らしをさせようと決意し、行方がわからなくなっているヘンチャードを探しに、18歳になったエリザベス＝ジェインを連れて、カスターブリッジに向かったのである。ところが、スーザンとエリザベス＝ジェインは、到着したカスターブリッジで、下層階級の人々が利用する宿屋に宿泊する金すらなく、そこに泊まるために、エリザベス＝ジェインが宿の給仕の仕事をしなければならないほど困窮していたのである。

カナダとイギリスの両国で、経済的に苦しい生活を余儀なくされてきたスーザンとエリザベス＝ジェインの暮らしぶりには、19世紀のイギリスの移民事情が反映されていると思われる。ナポレオン戦争後、イギリスは急激な人口増加による深刻な失業と貧困の問題を抱えていた。

例えば1801年の国勢調査では、イギリスの人口はおよそ1,600万人であったが、1851年には2,700万人にまで膨らんでいる（井野瀬113）。この人口増加問題を解決するためにイギリス政府が考案したのは、貧しい人々を移民として国外へ送り出すことで、人口過剰と、それに伴う国内の経済的・社会的窮状を解消しようとするものであった。カナダを例に取るならば、ナポレオン戦争後に起こった農産物の不作と人口増加に伴う失業者と貧困者を救済するため、イギリス政府は1820年と1821年に、3,083人のスコットランド人や2,591人のアイルランド人を、渡航する際に経済的援助を受けることのできる補助移民としてカナダに移住させている（Harper and Constantine 16-17）。ところが、ダドリー・ベインズ（Dudley Baines）によると、海外への移住者のおよそ40%は、その後、本国イギリスに戻ってきているのである（39-42）。そして、その帰国者の中には、植民地の厳しい自然環境や貧しい暮らしを耐えしのぐことができず、帰国して来た者が多く含まれていたのである。このようなところから、カナダとイギリスで、赤貧にあえぐスーザン母子の人生には、植民地での暮らしがうまくいかないため、イギリスに帰国して新生活をスタートさせようとしたものの、結局、本国でも満足のいく暮らしができないでいたという移民の現実が、描き出されていると言える。

それでは、経済的に厳しい暮らしをしてきたスーザンに対し、カスターブリッジの人々はどうの反応を示しているのだろうか。ヘンチャードと再会することができたスーザンは、間もなく彼とよりを戻す。しかし、過去の愚行が明らかになり、町長職を失うことを怖れた二人は、最近知り合ったばかりであるふりをして結婚するという芝居を打った。こうして町長の妻となったスーザンに対する町民の態度は、冷淡なものである。彼らは生気のない顔をして、貧しい暮らしを送ってきたスーザンを、口々に「幽霊」（“The Ghost”）(80) とか「ただの骸骨」（“a mere Skeleton”）(82) と呼び、「取るに足らない」（“so little”）(81) 女だと軽蔑する。彼女がヘンチャードと結婚するという話が広がった時は、彼らの結婚は「不可解な」（“inexplicable”）(80) ものであるとして疑問視された。町の住民は、貧相な様相をしたスーザンに不快感を示すのである。

ここで、スーザンがイギリスの植民地であったカナダで約12年間暮らしていた点に着目しながら、再び、イギリスの移民事情と絡めて、彼女に対する町の住民たちの反応に言及することにしたい。前述したように、イギリス政府は過度な人口増加を解消するために、貧民を植民地に移住させるような政策を展開した。そして、カナダについて言えば、そこへ移民するイギリス人の特徴は、ジェド・マーティン（Ged Martin）によると、他国に向かう移民たちに比べ、渡航費を払うのに精一杯なくらい非常に貧しかったということである（528）。加えて、植民地からの帰ってきた者の中には貧者が多く、そのような彼らに対しては否定的なイメージがもたれたばかりか、イギリス社会やイギリスの人々となじめず、孤立する人々も多くいたということである（Harper and Constantine 329-31）。つまり、一般的風潮からみて、カナダへの移民は、

イギリス国内において貧困層に属する人々が多いとみられており、当地からの帰国者に対する印象は良くなかったというわけである。『カスターブリッジの町長』におけるスーザンの経歴に目を向けると、彼女はヘンチャードと別れた後、ニューソンと共に幼い娘を連れてカナダに渡り、そこで長く暮らした。しかし、カナダでの過酷な毎日は、彼女から体力と生きる気力を奪っていった。このように、カナダで最低な生活をしてきたスーザンは、カナダをメトニミー的に表現している人物として解釈することができる。したがって、作者ハーディは、スーザンを蔑視するような町民の態度に、現実社会において、貧者が多かったカナダへの移民者や、そこからの帰国者に対する一般的悪評を描きこんでいたと考えられるのである。

次に、カナダ生まれで、カナダ育ちのカナダ人である2代目エリザベス＝ジェインが、イギリス人であるヘンチャードとの人間関係を築く中で味わう苦悩について分析していく。カスターブリッジで再会したヘンチャードとスーザンは、過去の愚行が明らかになることを怖れて、知り合ったばかりのふりをして、結婚するという芝居を打つ。ヘンチャードは、2代目エリザベス＝ジェインを実際の娘と思い込み、愛しみ、エリザベス＝ジェインもまた、ヘンチャードが彼女の実父であると信じるのである。ところが、スーザンが亡くなり、彼女が残した手紙を読んだヘンチャードは、エリザベス＝ジェインがニューソンとの間の娘であるという事実を知る。これに激高した彼は、その後、エリザベス＝ジェインにつらくあたるようになるのである。そして、このヘンチャードとエリザベス＝ジェインのこじれた父子関係は、彼女が彼の実子ではないからという理由だけではなく、イギリスとカナダの文化の違いを物語るものとして読み解くことができる。エリザベス＝ジェインは、ヘンチャードの家で町長の娘として暮らすようになった後も、“I won't be too gay on any account” (85) と言って、質素な暮らしむきに徹し、他人に対する気遣いを忘れないように生きることを決意する。次の引用は、町長の令嬢の立場にありながら、使用人たちにも謙虚に振舞う彼女の様子を描いた箇所である。

Whenever she took upon herself any domestic duty that the servants could have done—which she often did—he [Henchard] set it down to her faults of breeding. She was, it must be admitted, sometimes provokingly and unnecessarily willing to saddle herself with manual labours. She would go to the kitchen instead of ringing, “Not to make Phoebe come up twice,” she went down on her knees, shovel in hand, when the cat overturned the coal-scuttle; moreover, she would persistently thank the parlourmaid for everything.... (128)

一方、ヘンチャードは、そのようなエリザベス＝ジェインの態度を理解することができず、彼女を叱責する。そして、この彼の態度は、町長という社会的地位を獲得したヘンチャードが、

人物評価の尺度として階級意識を持っていることを示唆するものである。これに対し、エリザベス＝ジェインの場合、他人を思いやる性格やこれまでの貧しい生活が、使用人たちに感謝したりするような彼女の言動に表れているのは確かだが、彼女の振る舞いは、イギリスに比べて階級への意識が希薄なカナダで幼少期を過ごしたからこそ、生み出されたものであると考えられる。ここに、イギリスとカナダという異なる国の文化がつくりだした社会通念の違いが、人物造型の相違として表出されていると言えよう。

それでは、エリザベス＝ジェインが高価な衣服よりも、書物を買うことを優先させる価値観について考えていきたい。彼女はある日、ヘンチャードからプレゼントされた美しい手袋と、それに合う衣服を身に付けて外出した時、町の人々からその美しさを称賛される。しかし、高価なものを身に付けることに空しさを感じた彼女は、“Better sell all this finery and buy myself grammar-books, and dictionaries, and a history of all the philosophies!” (95) と、自戒の弁を口にするのである。このエリザベス＝ジェインの言葉から、彼女が物や金銭よりも、「文法書」や「辞書」⁵や「歴史書」に重きを置いていることがわかる。特に、文法書について言えば、この時代、それは一般的に学校での英語学習のためと、学校以外の場所で、個人が英語を学ぶために使われていた⁶。19世紀に、よく知られていた文法書として、イギリス人のジョセフ・アンガス (Joseph Angus) が著した、*Handbook of the English Tongue for the Use of Students and Others* (1872) をあげることができる。アンガスは、その序文で、自著が学生たちにとって、“to speak and write with accuracy, clearness, propriety and force” (v) ができるように手助けするためのものであると説明している。特に興味深いところは、学生たちが、その文法書を通じて、“to read intelligently our older writers” (v) ができるようになると述べられている点である。そして、そういった著述家たちの著作物は、“rich both in words and thought” (v) であると言っている。つまり、アンガスによると、当時、文法書は、学生たちに正確な英語を書いたり、話したりする能力を身に付けさせるためだけのものではなく、イギリス人著述家たちの書物を読めるようにするためのものであったというわけである。これが意味するのは、文法書は、学習者にとって母語そのものに精通するだけでなく、イギリス文化を理解し、知識を広げる助けとなっているということである。このような文法書が果たす役割を考慮すると、エリザベス＝ジェインが「文法書」に興味を示すところには、カナダで生まれ育った彼女の中に、イギリス文化を学び、人間として成長したいという意志があったからと言える。言い換えれば、彼女は、自分がカナダの出身であることに負い目を感じていたからこそ、イギリスに関する知識を広げようとする向上心を駆り立てられ、「文法書」の購入について言及したと思われるのである。さらにまた、既述したように、エリザベス＝ジェインは、階級意識や階級制度とはほとんど無縁のカナダで成長した。そして、ヘンチャードの娘として迎えられた後も、周囲の人々に対して人間的共感を持って接する彼女には、町の有力者の娘であると

いう思い上がりはみられない。この点からも、エリザベス＝ジェインは、「文法書」を通じて、単に見栄のために町長の令嬢に相応しい人物が遣う英語を身に付けようとしているのではなく、イギリス文化について知り、教養を身に付けようとしているのである。

小説の第20章をみていくと、そこには、エリザベス＝ジェインが、ウェセックスの方言を話す場面が描かれている。例えば彼女は、「成功する」という意味の“succeed”の代わりに“fay”(127)を用いたり、「マルハナバチ」を意味する“humble bees”を“dumbledores”(127)という方言を遣っている。そして、彼女が話す言葉には、“occasional pretty and picturesque use of dialect words”(127)があったとされている。つまり、エリザベス＝ジェインは、“occasional”と記されているように、たまにウェセックスの方言を遣うことはあっても、それは時によってということであり、地元の方言を完全には身に付けていなかったのである。この点に加えて、エリザベス＝ジェインが、言語習得期をカナダで過ごしていた点を考慮すると、彼女は、自分の英語が「カナダ英語」(Canadian English)であることへの懸念があり、「文法書」や「辞書」に関心を示したとも考えることができるのである。

それでは、「カナダ英語」とはどのようなものなのであろうか。「カナダ英語」という言葉が、いつ使用されるようになったかは定かではないものの、すでに19世紀の半ば頃には、カナダ人が遣う英語は「カナダ英語」と呼ばれていた⁷。J.K.チェンバーズ(J.K.Chambers)は、*Canadian Oxford Dictionary*の“Canadian English 250 Years in the Making”の中で、「カナダ英語」が、過去約2世紀の間に、主に、二つの地域からやって来た人々が使用していた英語をもとにして出来上がったものであると述べている(ix)。その一つ目は、アメリカ独立戦争に敗れ、アメリカのコネチカット州やマサチューセッツ州を含むニュー・イングランドや、ペンシルヴェニア州などの中部大西洋沿岸地域から、カナダに移住した王党派の人々が使用していた英語である(x)。二つ目は、ナポレオン戦争後から19世紀半ば頃までに、グレート・ブリテン島とアイルランドからカナダに移住してきた人々の英語である(x)。そして、前者の英語の“sounds and syntax”(x)に、前者のそれとは異なる後者の英語が混ざりあい、「カナダ英語」が形成されていったのである。

作中には、エリザベス＝ジェインが「カナダ英語」を遣っているとは記されていない。しかし、19世紀のカナダ人が、イギリスで用いられていた英語とは異なる英語を遣っていたという歴史的事実から、カナダで12歳まで育ったエリザベス＝ジェインの英語は、「カナダ英語」の影響を強く受けていたと推察できるのである。そして、彼女が、「文法書」や「辞書」に大きな関心を示したのは、彼女が「カナダ英語」から脱して、知性豊かな人間としてイギリスに同化したいと思っていたからであると考えられるのである。

以上の考察から、エリザベス＝ジェインは、カナダの文化を身に付けている。そしてまた、カナダで生まれたことに劣等感を抱き、「カナダ英語」から抜け出そうとしているという意味

において、彼女は、カナダをメトニミー的に表現している人物であることがわかるのである。

3 カスターブリッジにおけるルセッタ

ルセッタとは、ヘンチャードが仕事で時折訪れていたジャージー島で出会った女性である。彼女は、病気になったヘンチャードを献身的に看病した結果、彼と恋仲になり、結婚の約束をするが、ヘンチャードがスーザンとよりを戻してしまったため、二人の関係は終わってしまう。しかし、彼女は、スーザンが亡くなったという噂を聞きつけると、町にやって来て、ヘンチャードに結婚を迫るのである。ところが、そこで、ヘンチャードより魅力的なファーレイに出会い、彼に惹かれたルセッタは、ヘンチャードとの復縁を取りやめて、ファーレイと結婚し、町長夫人の座におさまるのである。

ルセッタは、カスターブリッジの人々の間で評判が悪い登場人物の一人である。その理由の一つとして、最貧層の住民であるジョブ (Jobb) が、ファーレイの商店で働けるよう口添えを彼女に頼みに来た時、彼女は身分の低い彼を見下して、冷たくあしらったからである。さらにまた、彼女はファーレイと結婚し、町長夫人の座を射止めたことに有頂天になり、町民の嫉妬の対象になる。加えて、就職の世話を断られたことに腹を立てたジョブが、ファーレイと結婚する前のルセッタとヘンチャードが恋仲であったことを暴露するラブレターを、人々に見せてしまったことから、彼らの反道徳的な交際が明らかになり、町では、彼女が結婚前に別の男性と親密な関係にあったことが問題視されるようになるのである。こうして、その横柄な態度や町民の嫉妬心や男性問題などから、町の人々の反感を買うようになっていったルセッタに対し、町民はヘンチャードとルセッタをかたどった人形をかついで、音楽を奏でながら町中を練り歩く「スキミティライド」(“skimmity-ride”) (256) と呼ばれるその土地特有の風習を実行する。Oxford English Dictionary によると、この風習は、「スキミントン」(skimmington) と呼ばれる不貞を犯した妻などを法に基づかず、地域の人々の手で罰する一種の私刑である。「スキミントン」と似たような風習は、イギリス以外のヨーロッパでも行われていた。例えばフランスでは、別の村からやって来た求婚者を拒絶したり、年齢差がある者同士の結婚を認めない場合に、村の人々が、その人物たちに対して鍋を叩いて嫌がらせをすることがあり、このような行為は「シャリヴァリ」(charivari) と呼ばれていた (Wadworth 64-65)。そして、この町民による「スキミティライド」を目撃したルセッタは、屈辱とショックのあまり、命を落としてしまうのである。

ここで、ルセッタの生い立ちと、彼女の出身地ジャージー島の歴史について一言することで、彼女とカスターブリッジの人々との間の不和について考察していきたい。ルセッタはもともと教育を受けた良家の子女であり、彼女の両親もまた、ジャージー島とイングランドの良家の出

身である。ルセッタが育ったジャージー島の歴史についてみていくと、この島は10世紀に、現在のフランスの一地域であるノルマンディー公国に併合された。そして、「ノルマン征服」によってイングランドの一部となった後も、ジャージー島はノルマンの法律を遵守し、それまでの習慣を留めることになり、島民の多くはイングランド系と、ケルト系の祖先を持つブルトン人や、ノルマン人などのフランス系の血を受け継いでいる (Hunt 45)。そしてまた、19世紀のジャージー島では、使用言語は教会、議会、裁判所ではフランス語、商用や軍事関係の分野では英語であったとされている (Hunt 45)。作中でルセッタが島の言語事情について、“There they speak French on one side of the street and English on the other, and a mixed tongue in the middle of the road.” (149) と語っているが、これは、同時代のこの島の言語状況を反映してのものと考えられる。総括すれば、フランスとイギリス両方の文化的要素が、ジャージー島の生活・文化・習慣を形成していたと言えるのである

ジャージー島で育ったルセッタは、どのような人物としてみることができるのであろうか。ルセッタは、“dark-haired, large-eyed, pretty woman, of unmistakably French extraction on one side or the other.” (147-48) と記されているところから、彼女にフランス系の血が流れていることは明らかである。また、ルセッタは島で暮らしていた時、「ル・シュール」(Le Sueur) と名乗っていたことから、彼女のどちらかの親がフランス系であることも推測がつく。これに加えて、彼女の口からは、英語よりもフランス語がより自然に出てくるところから、ルセッタがフランス文化の影響下で育ったということが容易に想像できるのである。このような外見と言語事情からみて、フランス人の血を引き、フランス文化の属性を多分に身に付けたルセッタは、フランスのメトニミーの登場人物と理解することができるのである。

それでは、同時代のイギリスとフランスとの関係に言及しながら、ルセッタに対するカスターブリッジの人々のスタンスについてみていくことにする。イギリスとフランスは、歴史上、頻繁に対立していたが、その状態はこの小説が執筆・出版された19世紀後半においても同じであった。植民地拡大を巡るフランスとの争いの中で、アフリカ進出に先手を打つべく、イギリスは1875年にエジプトのスエズ運河を買収した。一方、露土戦争が勃発すると、イギリスはチュニジアを手中に収めたフランスによる北アフリカ進出を懸念するようになっていった。これに対して、フランスもイギリスによるエジプト占領を警戒するなど、植民地を巡る思惑が、両国間の緊張を高めるものになっていた。この政治的背景からみて、イギリスにはフランスに対して対抗意識があったことは明らかである。そして、同時代の両国の緊迫状態は、小説の世界の中では、カスターブリッジの人々とルセッタの関係に置き換えて読むことができる。カスターブリッジというイングランドの町に、フランスという国の属性を持つルセッタがやって来て、町の実力者ファーレイと交際を始め、結婚するということは、イングランドにおけるフランスの影響力の拡大を意味することと解することができるのである。現実社会におけるイギリス

のフランスに向けられた嫌悪感、この小説の中では、ルセッタに不快感を示す町の住民の態度に投影されていると考えることができるのである。このように読むならば、作者ハーディはルセッタがカスターブリッジで辿る人生に、同時代のイギリスとフランスを巡る不安定な国際情勢を反映させているとみることができるのである。

4 ヘンチャードの没落とファーfreyとエリザベス＝ジェインの結婚

既述したように、国家的行事の祝賀日を境に、ヘンチャードはカスターブリッジでの社会的・経済的実権を失っていった。しかし、そのような彼には、彼とルセッタの関係を揶揄して行われた「スキミティライド」を通じて、人生をやり直すきっかけが与えられている。エリザベス＝ジェインが実の娘ではないことを知ったヘンチャードは、彼を実父と思って寄り添う彼女を冷たくあしらってきた。しかし、「スキミティライド」を見たことで倒れるルセッタを介抱するエリザベス＝ジェインの姿を見たヘンチャードは、優しい気持ちの持ち主である彼女こそ、孤独な彼の希望となる存在であることに気付く。そのような時に、死んだと思われていたニューソンが娘のエリザベス＝ジェインの安否を尋ねて、ヘンチャードの所へやって来る。この時、ヘンチャードはエリザベス＝ジェインを失うことを恐れ、彼女が死んだとニューソンに嘘をつくのである。そして、彼の嘘が明らかになれば、彼を恨んで、エリザベス＝ジェインが自分の元を離れていくのではないかと想像し、絶望する。そのため、彼は自殺まで思い立ち、町を流れる川にある「十の水門」と呼ばれる場所に向かい、そこで、コートと帽子を脱いで川に飛び込もうとする。死を決意した瞬間、彼が目にするのは、川の中を流れる「スキミティライド」で使用された自分の姿を模した人形であった。そして、その「死人のように浮いている」(“floating as if dead”)(293) 人形を見たヘンチャードは、再びコートと帽子を取って立ち上がるのである。ヘンチャードがなぜ自殺を思いとどまったかについて、テキストには書き込まれていない。しかし、「十の水門」での一件をきっかけに、彼はそれまで離れて暮らしていたエリザベス＝ジェインと再び暮らす決意を固め、“Henchard shaved for the first time during many days, and put on clean linen, and combed his hair”(294) と記されているように、自分の身なりを整えるのである。そして、そのような彼を支援するファーfreyと町会議員は、彼とエリザベス＝ジェインの生活のために種苗店を用意するのである。このようなヘンチャードの心境の変化からみて、「スキミティライド」で使用されたヘンチャードの人形が、自殺しようとした彼自身の死の代替になったとみることができる(風間61)。つまり、「スキミティライド」というカスターブリッジの古い風習が、ヘンチャードに人を愛する力を目覚めさせ、もう一度、新たな人生を始めようとする気力を湧きあがらせることになったと言えよう。

しかし、ヘンチャードは間もなくして、その町を去る決心を固めるのである。それでは、彼

の旅立ちから、どのような意味を読み取ったらいいのであろうか。ヘンチャードがニューソンに、エリザベス＝ジェインが死んだという嘘をついてからおよそ1年後、エリザベス＝ジェインが生きていることを知ったニューソンが、彼女を探しに再び町にやってくる。これを知ったヘンチャードは、エリザベス＝ジェインが、彼女に会いに来たニューソンを自分が追い返してしまったことに気付き、さらに、自分と彼女が本当の親子ではなかったことを知って、自分のことを憎むのではないかと考える。そしてまた、エリザベス＝ジェインとファーフレイが結婚することを知った彼は、“Henchard vowed that he would leave them to their own devices, put nothing in the way of their courses, whatever they might mean.” (300) とあるように、二人の結婚を祝福し、彼らの選択を尊重するのである。こうして、エリザベス＝ジェインの前から姿を消す決心をしたヘンチャードは、カスターブリッジを出ていく。次の引用は、かつて農夫として市場にやって来た時と同じ風体で、町を去っていく彼の様子を描いた場面である。

During the day he had bought a new tool-basket, cleaned up his old hay-knife and wimble, set himself up in fresh leggings, knee-naps and corduroys, and in other ways gone back to the working clothes of his young manhood, discarding for ever the shabby-genteel suit of cloth and rusty silk hat that since his decline had characterised him in the Casterbridge streets as a man who had been better days. (306)

ここからは、彼が古いタイプの自分の時代が終わったことを自覚し、町の将来を若いファーフレイとエリザベス＝ジェインに託して、身を引いたことが読み取れる。そして、このような昔日の栄光を享受するイングランドをメトニミー的に表現しているとみることでできるヘンチャードの旅立ちから、イングランドはひとつの役目を終えたと解釈できるのである。

最後に、カスターブリッジの住民はエリザベス＝ジェインに対してどのような感情を表し、ファーフレイと彼女の結婚をどのようにみているか考察していく。カスターブリッジにやって来て間もなく、エリザベス＝ジェインはヘンチャードの家族として裕福な暮らしができるようになるが、町では目立たない存在であった。しかし、町民は少しずつ、彼女に興味を持ち始めるようになっていく。例えば「スキミティライド」の決行についてパブで議論がなされている最中、町民バズフォード (Buzzford) は、エリザベス＝ジェインとルセッタを比較し、“Now there’s a better looking woman than she [Lucetta] that nobody notices at all, because she’s [Elizabeth-Jane’s] akin to that mandy fellow Henchard.” (264) と評して、エリザベス＝ジェインに同情を寄せつつも、彼女が魅力的な女性であると公言するのである。ルセッタの死後、独り身になったファーフレイは、ルセッタと出会う前に好意を寄せていたエリザベス＝ジェインの優しさと思慮深さを再確認し、彼女にプロポーズをする。二人の結婚が決まった時、町には、

ファーfreyとエリザベス＝ジェインでは身分が釣り合わないと考え、彼らの交際を心よく思わない者もいる。一方で、住人の一人であるコーニー（Coney）は、彼女について、人から好かれる女性であると評価し、ファーfreyに相応しい女性だと褒めている。そして、最終的にはファーfreyとエリザベス＝ジェインの結婚を納得のいくものであるとみなす人々の態度から、二人の結婚は、町の住民に受け入れられたと言えるのである。

町民がエリザベス＝ジェインに対して良い印象を強めていくのに対し、ルセッタに対する彼らが示した反応は、それとは正反対のものであった。エリザベス＝ジェインとルセッタは、二人ともカスターブリッジの外からやって来たよそ者である。前者が約12年間をカナダで過ごし、後者はジャージー島で暮らしていたという点で、両者はカスターブリッジの人々とは異なる文化的背景を持った人物であると言える。ところが、この二人の違いは、町の住民に対する態度にみられるのである。ルセッタはファーfreyと結婚したことで居丈高に振舞う。一方、カスターブリッジに来た頃から、エリザベス＝ジェインは住民に思いやりの態度で臨み、親切に接していた。そして、町長であり、裕福な穀物商であるファーfreyと結婚し、何不自由のない生活が約束される中でも、彼女が謙虚さを失うことはない。町長夫人になったエリザベス＝ジェインの町の人々に対する態度は、次のようなものである。

She could perceive no great personal difference between being respected in the nether parts of Casterbridge, and glorified at the uppermost end of the social world. (322)

この引用が明らかにしているように、彼女は、身分や階級に左右されないカナダで身に付けた生き方を貫いているのである。つまり、エリザベス＝ジェインの人間観の根幹には、カナダの社会風土が生き続けていて、イギリスにおいてもそれに基づく生活態度を持ち続けているというわけである。そして、このようなエリザベス＝ジェインの人間性を評価する町の人々は、彼女を受け入れるようになっていったと言えるのである。

以上のことから、ファーfreyとエリザベス＝ジェインの交際を温かい目で見つめ、結婚を祝福し、カスターブリッジの町長と町長夫人として二人を迎えるカスターブリッジは、ヘンチャードが去った後、ファーfreyが持ち込んだ穀物栽培の技術と知識や、エリザベス＝ジェインが身に付けていた価値観に感化されて、新たな町として生まれ変わるであろうことを読者に予感させるのである。そして、この二人の結婚には、スコットランドとカナダの知恵と精神性が、イングランドの発展に大きく貢献していることが暗示されていると読むことができる。

おわりに

以上の考察から、古風なイングランドを思わせるカスターブリッジにおいて、町の住民が現実を見据えて町長に選んだのは、経済的・社会的に過去の規範に囚われているヘンチャードではなく、新たに台頭してきたスコットランドをメトニミー的に表しているファーフレイであった。ファーフレイがカスターブリッジの新町長として、そして、穀物商として成功を享受する経緯は、スコットランドが発展を遂げるプロセスを彷彿とさせるのである。一方で、カスターブリッジという町を、町長として、あるいは穀物商として存在感を放っていたヘンチャードが、自ら町を去るシーンには、従来の因習に固執する古きイングランドの終焉が暗示されていると言える。したがって、この元町長と新町長の交代劇には、イングランドの覇権の弱体化とスコットランドの台頭が描出されているのである。

これに加えて、小説には、イギリスの移民事情や同時代のイギリスとフランスの政治的対立が描き込まれていた。カナダに移住したスーザンとエリザベス＝ジェインたちが経験する惨めな暮らしには、イギリスの移民事情の現実が反映されている。そして、カナダで生まれ育ち、階級意識の低いエリザベス＝ジェインは、カナダのメトニミー的登場人物として解することができるのである。ジャージー島出身のルセッタは、フランス語を流暢に話し、フランス人の血が流れていたところから、フランスをメトニミー的に表現している人物であった。そのような彼女に対するカスターブリッジの住民たちの冷淡な態度の裏には、当時のイギリスとフランスの政治的対立が投影されているとみることができる。そして、小説の最後で、カスターブリッジという町が、ファーフレイとエリザベス＝ジェインに大きく依存することになるところからは、スコットランドとカナダがイングランドを支える重要な地域であり、国であるとするハーディの国際感覚を読み取ることができるのである。

*本稿は、『英米文学の地平：W・ワーズワスから日系アメリカ人作家まで』（田村一男監修、金星堂、2012年3月30日発行）に掲載された拙論「トマス・ハーディの『カスターブリッジの町長』—カスターブリッジに投影された大英帝国」に、登場人物を解釈するための「メトニミー」という新しい視点を加えて、さらに発展させたものである。

注

- 1 「メトニミー」は、「メタファー」(metaphor) や「シネクドキ」(synecdoche) といった比喩表現の一つである。「メトニミー」が、その他の比喩表現と違う点を明らかにするために、その特徴をさらにあげると、それは、ある物をそれを連想させる物で言い換える修辞法であり (Wilden 198)、「メトニミー」では、二つの事物が「隣接していること」(“contiguity”) (White 128) が前提になるとされている。つまり、「メトニミー」は、二つの事物の関係が、空間的に、時間的に、あるいは観念的に隣接しているのである (野内38)。
- 2 妻を売り渡すという出来事は、ハーディが1895年のウェセックス版の序文で断りを入れているように、『ドーセット・カントリー・クロニクル』(*Dorset Country Chronicle*) 紙に掲載されていた記事にヒントを得たものである (*Thomas Hardy's Personal Writings* 18)。クリスティン・ウィンフィールド (Christine Winfield) は、ハーディが目にした記事とは、1826年5月25日付、1827年12月6日付、1829年10月16日付のものではないかと述べている (224-31)。
- 3 本稿における引用は、*Thomas Hardy, The Mayor of Casterbridge: The Life and Death of a Man of Character* (London: Penguin, 2003) によるものである。
- 4 都留信夫は、これがヴィクトリア女王の子供であるアリス王女 (Princess Alice) の誕生か (1843年)、アルフレッド王子 (Prince Alfred) の誕生 (1844年) を指していると説明している (671)。
- 5 「辞書」についてだが、この作品の出版時を考慮すれば、まず想起されるのは、サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson) による、1755年出版の *A Dictionary of the English Language* であろう。さらにまた、アメリカでノア・ウェブスター (Noah Webster) が1828年出版した *An American Dictionary of the English Language* と、その後の改訂版が考えられる。
- 6 19世紀の学校で使用された最も優れた文法書として、例えば17世紀末から出版されていたアメリカ人リンドレー・マレー (Lindley Murray) によって書かれた、*English Grammar Adapted to the Different Classes of Learners. With an Appendix, Containing Rules and Observations, for Assisting the More Advanced Students to Write with Perspicuity and Accuracy* (1795) があげられる。学校教育現場以外の場所で、幅広い階層の若者が英語を学ぶために使用していた文法書としては、エドワード・シェリー (Edward Shelley) の *The People's Grammar, or English Grammar without Difficulties for 'The Million'* (1848) が考えられる。これは、“the mechanic and hard-working youth, in their solitary struggles for the acquirement of knowledge” (Linn 76) 向きに書かれたと銘打たれている。
- 7 1857年に、カナダ人のギーキー (Geikie) という聖職者が、その手紙の中で「カナダ英語」という言葉を用いていることから、19世紀半ばには、既に、「カナダ英語」として区別されているものがあつたと考えられる (Chambers ix)。

参考文献

- Angus, Joseph. *Handbook of the English Tongue for the Use of Students and Others*. London: The Religious Tract Society, 1872.
- Baines, Dudley. *Emigration from Europe, 1815-1930*. Basingstoke: Macmillan, 1991.
- Brown, Douglas. *Thomas Hardy*. Westport: Greenwood Press, 1980.
- Burke, Kathleen. "Canada in Britain: Returned Migrants and the Canada Club." *Emigrant Homecomings: The Return Movement of Emigrants, 1600-2000*. Ed. Marjory Harper. Manchester: Manchester UP, 2005. 184-96.
- Chambers, J.K. "Canadian English 250 Years in the Making." *Canadian Oxford Dictionary*. Ed. Katherine Barber. Oxford: Oxford UP, 1998. ix-x.
- Colley, Linda. *Britons: Forging the Nation*. Oxon: Routledge, 1990.
- Hardy, Thomas. *The Mayor of Casterbridge*. 1886. London: Penguin, 2003.
- Harper, Marjory, and Stephen Constantine. *Migration and Empire*. Oxford: Oxford UP, 2010.
- Holmes, Colin. "Hostile Images of Immigrants and Refugees in Nineteenth and Twentieth-Century Britain." *Migration, Migration History, History: Old Paradigms and New Perspectives*. Eds. Jan Lucassen and Leon Lucassen. Bern: Peter Lang, 1997. 317-34.
- Hoppen, K. Theodore. *The Mid-Victorian Generation 1846-1886*. Oxford: Clarendon Press, 2008.
- Hunt, Peter. *A Brief History of Jersey*. Sussex: Société Jersiaise, 1998.
- Linn, Andrew. "English Grammar Writing." *The Handbook of English Linguistics*. Eds. Bas Aarts and April McMahon. Malden: Blackwell publishing, 2006. 72-92.
- Martin, Ged. "Canada from 1815." *The Oxford History of the British Empire: The Nineteenth Century*. Ed. Andrew Porter. Oxford: Oxford UP, 1999. 522-45.
- "Metonymy." *A Dictionary of Literary Terms*. Martin Gray. Harlow: Longman York Press, 1984.
- Orel, Harold, ed. *Thomas Hardy's Personal Writings: Prefaces, Literary Opinions, Reminiscences*. London: Macmillan, 1967.
- "Skimmington." *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. New York: Oxford UP, 1989.
- Wadsworth, Frank W. "'Rough music' in the Duchesse of Mulfi: Webster's Dance of Madmen and the Charivari Tradition." *Rite, Drama, Festival, Spectacle: Rehearsals toward a Theory of Cultural Performance*. Ed. John J. MacAloon. Philadelphia: The Institute for the Study of the Human Issue, 1984. 58-75.
- White, Hayden. *Tropics of Discourse: Essays in Cultural Criticism*. Baltimore: The John Hopkins UP, 1978.
- Wilden, Anthony. *The Rules Are No Game: The Strategy of Communication*. London: Routledge and

『カスターブリッジの町長』再考

- Kegan Paul, 1987.
- Wilson, Keith. Notes. *The Mayor of Casterbridge*. By Thomas Hardy. London: Penguin, 2003. 323-70.
- Winfield, Christine. "Factual Sources of Two Episodes in *The Mayor of Casterbridge*." NCF 25 (1970) : 224-31.
- 井野瀬久美恵編『大英帝国という経験』講談社、2007年。
- 風間末起子「*The Mayor of Casterbridge* における劇的瞬間」『ハーディ研究』第35号、日本ハーディ協会、2009年、35-50頁。
- 木畑洋一「イギリス近代国家とスコットランド、ウェールズ」柴田三千雄他編『世界の構造化』岩波書店、1991年、171-72頁。
- キャンベル、R.H. 「ヴィクトリア時代の変容」富田理恵・家入葉子訳『スコットランド史：その意義と可能性』未来社、1998年、168-86頁。
- 都留信夫「ハーディとウェセックス」日本ハーディ協会編『トマス・ハーディ全貌』音羽書房鶴見書店、2007年、668-86頁。
- 野内良三『レトリック入門』世界思想社、2002年。
- 深澤俊編『ハーディ小事典』研究社出版、1993年。

(はしもと・しほ 外国語学部講師)